

第5章 高等部本科

I 結果と考察

1. 教員に関する内容

1) 教員の属性

教員の年齢に対する回答（145件）では、平均年齢42.0歳で、最小値24歳、最大値63歳であった。また教員歴は、平均値16.6年で最小値1年、最大値44年であった。特別支援学校（聴覚障害）での指導歴は、平均値7.5年で最小値0年、最大値34年であった。特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導歴は、平均値4.2年で最小値0年、最大値26年であった。特別支援学級（難聴）ないし通級指導教室（難聴）での指導歴は、平均値0.1年で最小値0年、最大値5年であった。通常学級での指導歴は、平均値2.4年で最小値0年、最大値31年であった。

2) 人工内耳装用生徒の指導にあたって学習したい研修内容

人工内耳装用生徒の指導にあたって学習したい研修内容に対する回答（122件）では、「基礎的研修」が69件（56.5%）で最も多かった。次いで、「言語指導や学習事項に関する事項」で14件（11.5%）であった。「関連機関からの情報」は14件（11.5%）、「維持・管理」は8件（6.6%）、「発達上の特性」が7件（5.7%）、「聞こえの特性」は4件（3.3%）、人工内耳を装用した成人の話、障害認識」は4件（3.3%）、「進路」は2件（1.6%）であった。障害認識やアイデンティティ及び進路の学習を希望する回答が見られたことは、担当する生徒が高等部段階にあることが関与しているものと思われる。

2. 人工内耳装用児が在籍する学級について

1) 担当生徒数

「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体の担当生徒数は自立活動や聴能担当等の担当教員によると推察される2校の回答を除くと、平均で4.9人であった。うち人工内耳を装用している生徒は、平均で1.8人（標準偏差1.3）であった。

2) 医療機関との連携の有無

医療機関との連携の有無について、連携ありとの回答は、43件で全体の30.3%、連携なしとの回答が99件で全体の69.7%であった。「重複なし」では、連携ありとの回答は30件で全体（99件）の30.3%、連携なしとの回答が69件で全体の69.7%であった。「重複あり」では、連携ありとの回答は12件で全体（39件）の30.8%、連携なしとの回答は27件で全体の69.2%であった。以上のことから、医療機関と連携している学校は、およそ3分の1であり、「重複なし」と「重複あり」で、大きな差は見られなかった。

連携の内容には、44件の回答があった。主な回答で最も多かったのは、定期健診における聞こえの状態や機器の調整に関する情報を医療機関から受けるというもので、25件（56.8%）であった。次いでケース会議や連絡会議やネットワーク会議等による情報交換が11件（25.0%）、保護者を通じた連携が8件（18.2%）であった。

3. 人工内耳装用生徒の指導について

1) 補聴器装用生徒と比べて、指導上、特に課題と感じている点

補聴器装用生徒と比べて、指導上、特に課題と感じている点に関する記述回答（148件）を分類し、表5-1に示した。「特になし」とする回答が最も多く、補聴器装用生徒と同様の課題が人工内耳装用生徒にも存在することがうかがわれた。次いで、聞き間違いや聞き漏らしがあることの認識と指導が多く、この点も補聴器装用生徒の課題と共通するものと思われる。

表5-1 補聴器装用生徒と比べて、指導上、特に課題と感じている点の分類と回答数

分 類	回答数(件)
人工内耳に関する基礎的知識や管理方法の本人及び保護者に対する指導	21
自宅での活用方法	4
人工内耳を使わない	8
聞き間違いや聞き洩らしがあることの認識と指導	25
聞こえは良いが理解していない	12
発音・発語の不明瞭さ	5
聞こえていると思い話者を見ない	8
健聴者とのコミュニケーション	3
手話を用いない生徒への指導	9
行動上の制約がある点	6
自閉症の生徒の音過敏	1
人工内耳装用者のモデル不足	1
頭痛が生じる	1
最適な大きさの音の提示の仕方	1
個人差の大きさ	3
特になし	40

2) 補聴器装用生徒と比べて、指導上工夫している点

表5-2に補聴器装用生徒と比べて、指導上工夫している点に関する記述回答（126件）の分類と回答数を示した。聴覚や口話を主に使うという回答が多く、人工内耳装用生徒の聞こえの良さを生かした指導を心掛けていることがうかがえる。ただし、ことばを正しく受信できているか、話された内容を理解できているかの確認については、視覚的手段である文字や指文字を用いる工夫をしていることがわかった。また、衝撃への対策、人工内耳の装用側から話しかけるなど指導上の工夫が、安全面への配慮やコミュニケーションの環境設定にもなされていることが示された。加えて、「特になし」とする回答も多く、補聴器装用生徒と同様の工夫がなされていることが示唆される。

3) 補聴器装用生徒と比べて、指導しやすい点

表5-3に補聴器装用生徒と比べて、指導しやすい点の回答（132件）の分類と回答数を示した。音や言葉の反応の良さが、最も多く、語彙数の多さ、コミュニケーションの良さ、指導できる語の多さに関連しているものと思われる。人工内耳の装用が、言語やコミュニケーションの力を高め、教師の指導の幅を広げていることがうかがえる。一方で、「特になし」の回答も多く、人工内耳の装用は、音や言葉の受信には効果が高いものの、聞こえの改善のほかの教育的目標においては、課題が多いということがうかがえる。

表5-2 補聴器装用生徒と比べて、指導上工夫している点の分類と回答数

分 類	回答数(件)
聴覚や口話を主に使う	24
文字や指文字の利用による理解の確認	14
音声と手話を併用する	8
人工内耳装用方向からの話しかけ	5
補聴器装用児よりも多くの語彙を指導する	1
簡単な言葉で話す	2
発音・発語の正確さを求める	5
生徒の注意が教師に向いてから話す	2
多様なコミュニケーション手段を獲得させる	2
コミュニケーションのマナー指導	2
衝撃への対策	12
人工内耳の装用の確認	1
人工内耳の管理に関する知識	6
その他	1
特になし	41

表5-3 補聴器装用生徒と比べて、指導しやすい点の分類と回答数

分 類	回答数(件)
音や言葉に対する反応の良さ	41
語彙数の多さ	7
コミュニケーションの良さ	28
指導できる語の多さ	13
思考力の高さ	4
機器の管理	3
注意する力が高い	1
特になし	35

4. 対象生徒について

1) 年齢

生徒の年齢は、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では、平均値が16.5歳、最小値15歳、最大値20歳であった。

2) 受診時年齢

受診時の年齢について、「重複なし」と「重複あり」を加えた高等部本科全体では、平均値1.2歳、最小値0歳、最大値12.6歳であった。1歳までに129人(50.9%)、3歳までに163人(64.4%)の者が受診していた。ただし無回答の割合が33.6%と高く、生徒の受診年齢を高等部本科教員が把握していない可能性が示唆される。

3) 人工内耳の装用状態

対象生徒の人工内耳装用状態について、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では右耳装用が140人(55.3%)、左耳が77人(30.4%)、両耳装用が35人(13.8%)であった。「重複なし」では、右耳装用が107人(54.6%)、左耳が77人(29.1%)、両耳装用が31人(15.8%)であった。「重複あり」では、右耳装用が30人(56.6%)、左耳が19人(35.8%)、両

耳装用が4人(7.5%)であった。

また「片耳装用の場合、もう一方の耳への補聴器装用の有無」について、高等部本科全体では、「あり」が117人(46.2%)、「なし」が104人(41.1%)、無回答が32人(12.6%)であった。「重複なし」では、「あり」86人(43.9%)、「なし」が80人(40.8%)、無回答30人(15.3%)であった。「重複あり」では、「あり」が31人(58.5%)、「なし」が20人(37.7%)、無回答が2人(3.8%)であった。

「学校での補聴援助システム使用の有無」の問いに対しては、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では、「あり」が76人で30%、「なし」が172人で68%、無回答が5人で2%であった。「重複なし」では「あり」が57人で21.9%、「なし」が134人で68.4%、無回答が5人で2%であった。「重複あり」では「あり」が18人で34%、「なし」が35人で66%であった。「重複なし」と「重複あり」とともに、2～3割に補聴援助システム使用があるとの回答が見られた。

以上のことから高等部本科の生徒の人工内耳の装用状態については、片耳装用が多く、片耳装用者のうち約半数の者が人工内耳の反対側に補聴器を装用していることが明らかとなった。また補聴援助システムの使用は、多くないことがわかった。

4) 人工内耳装用開始時期

人工内耳装用開始時期について「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では、平均値5.2歳、最小値0.7歳、最大値17歳であった。1歳までに10人(4%)、3歳までに99人(39.2%)の者が装用を開始していた。無回答は、72人(28.5%)であった。無回答の割合が、他の問いと比較して高く、高等部本科の生徒の人工内耳開始年齢について、受診時年齢と同様に高等部本科教員が把握していないことが示唆される。

5) 手術前の平均聴力レベル

手術前の平均聴力レベルは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では、右耳105dB、左耳105dBであった。「重複なし」は、右耳105dB、左耳104dB、「重複あり」は、右耳104dB、左耳108dBであった。

6) 現在の平均聴力レベル

現在の平均聴力レベルは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では、右耳38dB、左耳46dBであった。「重複なし」は、右耳39dB、左耳43dB、「重複あり」は、右耳49dB、左耳53dBであった。

人工内耳または補聴器を装用していない耳の平均聴力レベルは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では、平均値が108dB、「重複なし」で108dB、「重複あり」で105dBであった。

7) 重複障害の有無

表5-4に重複する障害の種別の数と割合を示した。知的障害が69.8%で最も多かった。

8) 普段使用するコミュニケーションモード(複数回答可)

図5-1aには高等部本科全体の普段使用するコミュニケーションモードの種類と割合を示し、図5-1bには「重複なし」と「重複あり」の比較を示した。高等部本科全体では、手話、音声、指文字を中心として、読話やキューサイン、筆談も利用されていることがわかった。「その他」

表5-4 重複する障害種とその数及び割合 () 内は%

障害種	回答数(件)
視覚障害	5 (9.4)
知的障害	37 (69.8)
肢体不自由	3 (5.4)
病弱・身体虚弱	2 (3.80)
その他	14 (26.4)
無回答	2 (3.8)

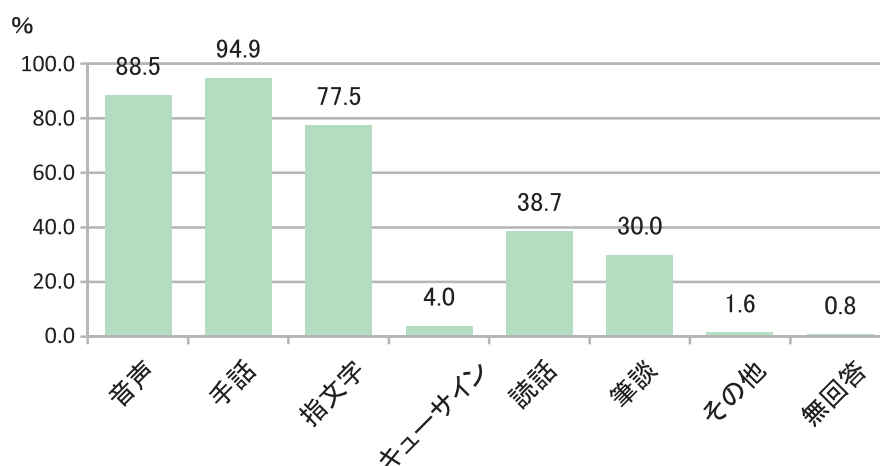


図5-1a 生徒が普段使用するコミュニケーションモード (高等部本科全体)

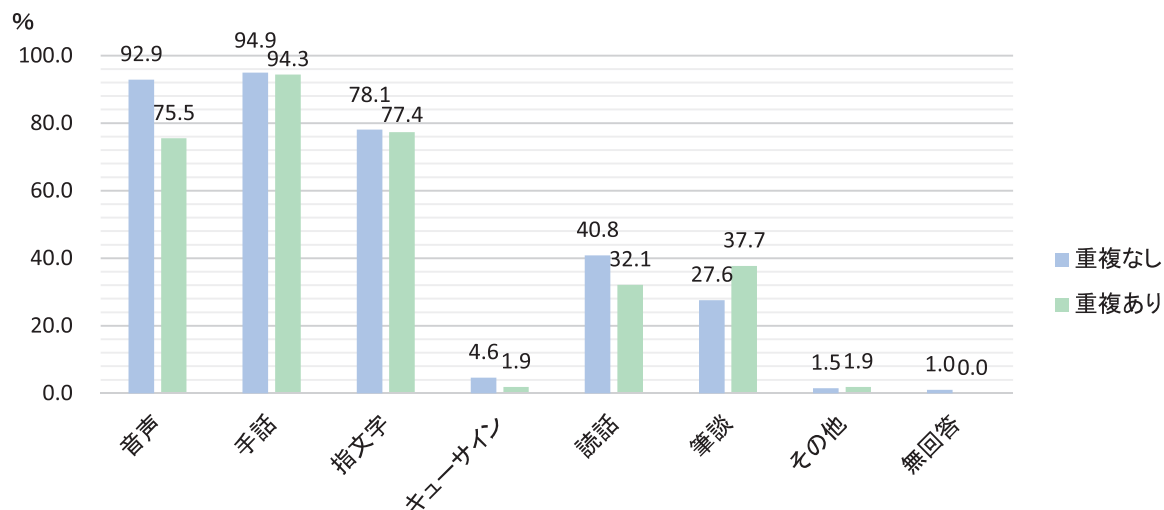


図5-1b 生徒が普段使用するコミュニケーションモード (「重複なし」「重複あり」の比較)

には、スマートフォンのアプリやライン、口話との回答が見られた。また、「重複なし」と「重複あり」の比較では、「重複なし」において、音声や読話の使用の割合が「重複あり」よりも高く「重複あり」では筆談の割合がやや高かった。

9) 上記のコミュニケーションモードの中で、学校での学習時に用いるもの

図5-2aには高等部本科全体の学習時に使用するコミュニケーションモードの種類と割合を示した。多様なモードが用いられていることがわかり、そのなかでも第1番目に用いるコミュニケーションモードには音声が多かった。ただし2番目に用いるモードとしては、2割程度であった。手話は、第1番目、第2番目としてもともに使用割合が高かった。また指文字や読話及び筆談は、第1番目として使用するよりも、第2番目に使用する回答のほうが多かった。

図5-2bには「重複なし」の回答を示し、図5-2cには「重複あり」の回答を示した。「重複なし」では、第1番目に使用するモードには音声が多く、「重複あり」では手話が多かった。「重複なし」の生徒のほうが音声を主体とした学習が行われていることがわかった。

また普段使用するコミュニケーションモードの結果と比較すると、読話は、学習場面ではあまり利用されていないことがわかった。これは、学習時は、黒板や文字が資料を見ることが多いなど、日常会話時とはコミュニケーションの環境が異なることも関連しているものと思われる。

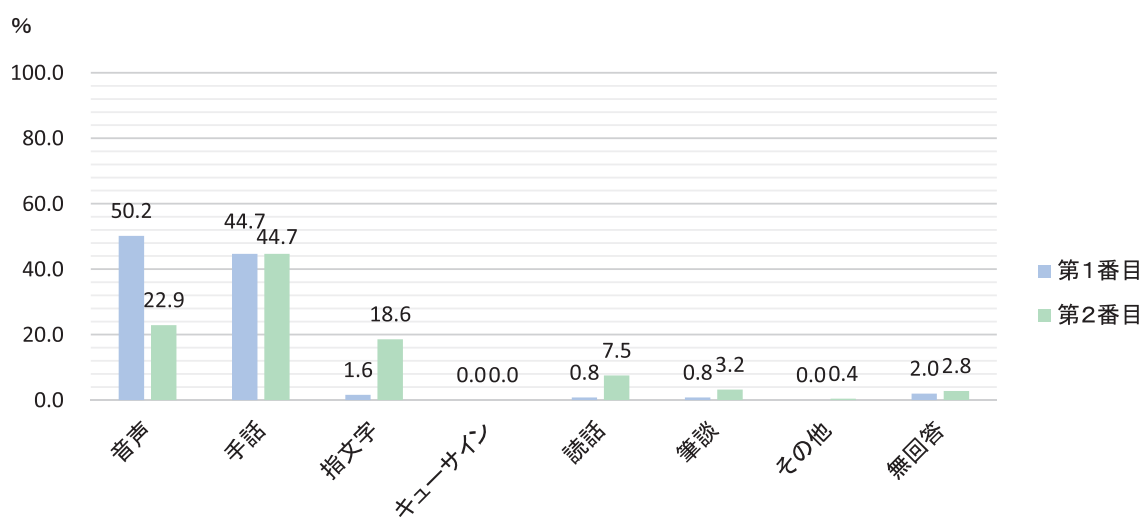


図5-2a 生徒が学習時に使用する
コミュニケーションモード（高等部本科全体）

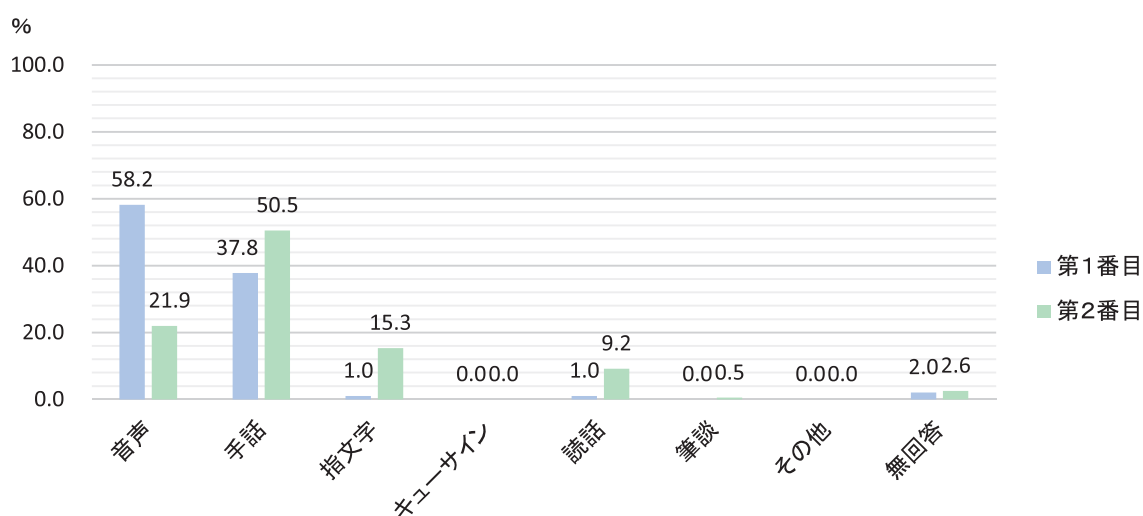


図5-2b 生徒が学習時に使用する
コミュニケーションモード（重複なし）

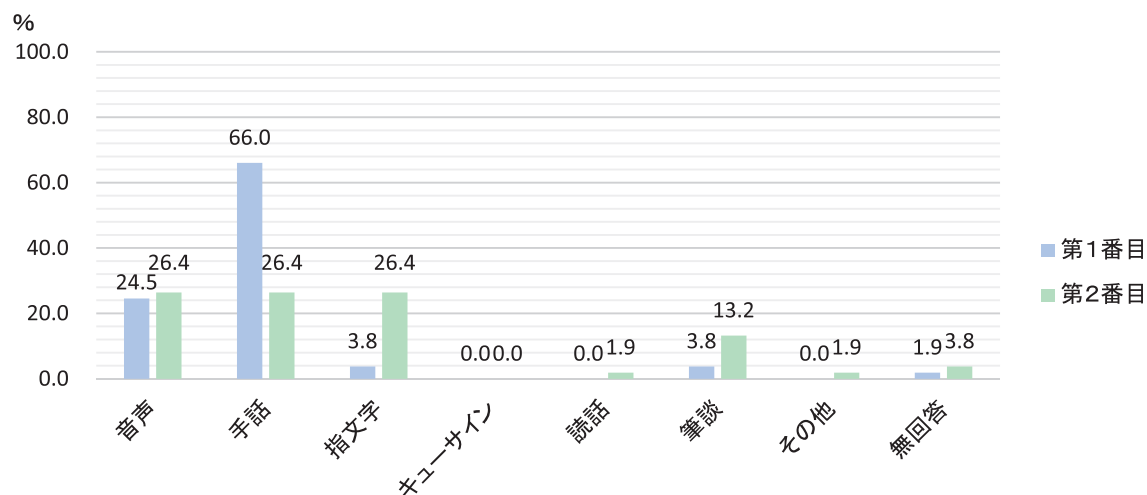


図5-2c 生徒が学習時に使用する
コミュニケーションモード(重複あり)

10) 家族構成について（きょうだい、聴覚障害者の近親者の有無）

家族構成について、きょうだいがありと回答したのは、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体で、199人（78.7%）であった。また「重複なし」では、155人（79.1%）、「重複あり」では、41人（77.4%）であった。家族構成の「きょうだい」については、学年、「重複なし」と「重複あり」にかかわらず、きょうだいがいるという回答が約8割であった。

「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体で近親者の聴覚障害者が有りと回答したのは、34人（13.4%）であった。「重複なし」では29人（14.8%）、「重複あり」5人（9.4%）であった。

11) 学校歴

図5-3aに学校歴の高等部本科全体の結果と、図5-3bに「重複なし」と「重複あり」を比較した結果を示した。全体的傾向は、いずれの発達段階においても、特別支援学校（聴覚障害）への在籍率が一番高かった。ただし、これは高等部本科において特別支援学校（聴覚障害）に在籍する聴覚障害生徒の結果であり、人工内耳装用生徒全体の傾向かはわからず、普通校在籍者

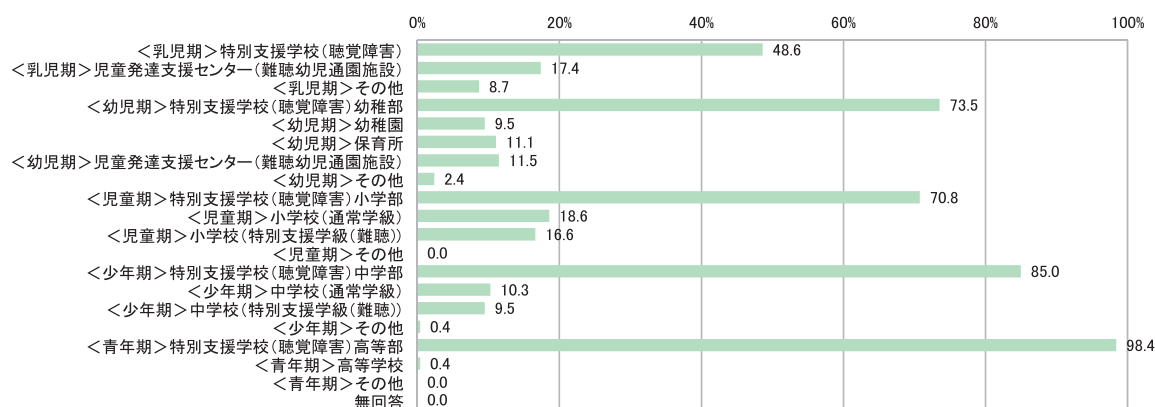


図5-3a 学校歴
高等部本科全体

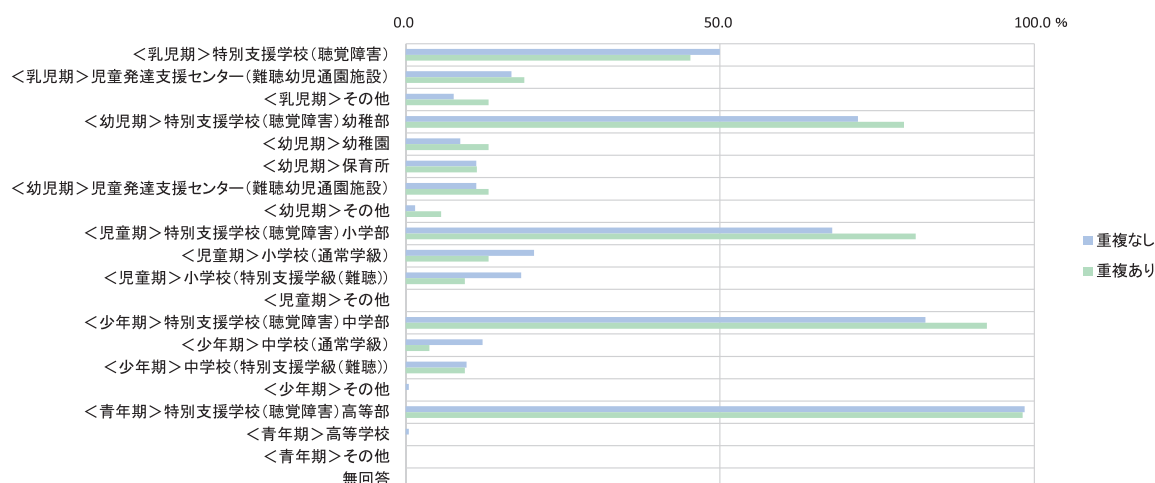


図5-3b 学校歴
(重複なし) と (重複あり) の比較

を対象とした同様の調査が必要であろう。

「重複なし」と「重複あり」の比較では、「重複あり」の特別支援学校（聴覚障害）の在籍率がやや高かったが、高等部本科段階では、ほとんど差が見られなかった。「その他」については、乳幼児期に関する記述が多く、主なものは医療療育相談機関、学校などの教育機関、保育園であり、幼児期では医療療育相談機関、保育園、幼稚園、大学病院などであった。また少年期に「通級指導教室（難聴）」との回答も見られた。

12) 今後の進路

今後の進路について、「重複なし」と「重複あり」を合計した高等部本科全体では、就職が最も多く、51.0%であった。進学は、一般大学が21.7%、特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科が15.0%、筑波技術大学が10.3%、高等専門学校が3.2%、その他が6.3%、職業能力開発校が0.4%であった。進学の合計は、約半数であった。

表5-6に、「重複なし」と「重複あり」の結果を示した。「重複なし」と「重複あり」とともに

表5-6 今後の進路の分類と回答数及び割合 () は%

		重複の有無	重複なし	重複あり
就職・その他	就職		87 (44.4)	40 (75.5)
	職業能力開発校		1 (0.5)	0 (0)
	その他		7 (3.6)	9 (17.0)
	特別支援学校 (聴覚障害)専攻科		34 (17.3)	3 (5.7)
大学等	高等専門学校		8 (4.1)	0 (0)
	筑波技術大学		25 (12.8)	0 (0)
	一般大学		50 (25.5)	3 (5.7)
	その他		12 (6.1)	0 (0)
無回答			13 (6.6)	1 (1.9)

就職が最も多いが、その割合は、「重複あり」でより高かった。「重複なし」では就職に次いで、一般大学への進学希望が多く、次いで特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科、筑波技術大学の順であった。また「その他」では7件回答があり、福祉的就労が2件、未定などであった。「重複あり」の進学希望先は、特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科が多かった。「その他」では8件回答があり、福祉的就労が多かった。

以上のことから、今後の進路については、「重複なし」と「重複あり」も、就職を希望する者が、最も多いということがわかった。また進学については、「重複なし」のほうが高い割合であり、また専門学校や職業能力開発校も視野に入れられ、進学先が多様であった。

13) 聴覚活用の状態について

①音への気付き

「音への気付き」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」73.9%、「重複あり」62.2%であり、良好な者が過半数である（図5-4a、図5-4b）。これは、人工内耳においては、閾値そのものは30dB程度まで低下するため、重度聴覚障害者の補聴器装用閾値に比べるとかなり低い値に設定されているため、当然のことでもある。「重複なし」は「重複あり」に比べて良好な者が多い。

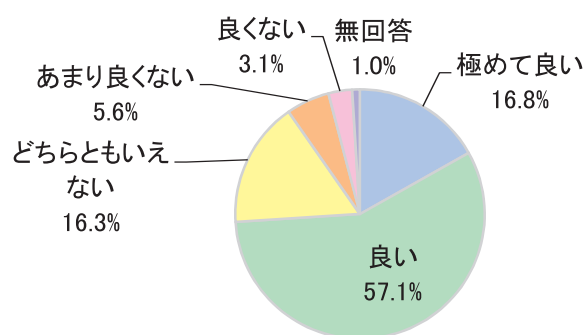


図5-4a 音への気付き（重複なし）

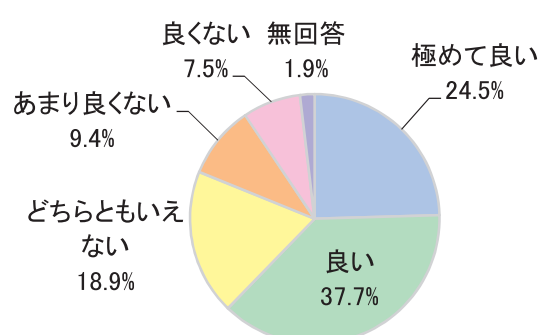


図5-4b 音への気付き（重複あり）

②言語音の聞き取り

「言語音の聞き取り」は、「極めて良い」と「良い」を合わせると、「重複なし」63.3%、「重複あり」39.7%であり、「重複なし」は良好な者が過半数ではあるが、「重複あり」は「重複なし」に比べると少ない（図5-5a、図5-5b）。前述の「音への気付き」と比較するとやや低い数字である。これは、音の検出閾値と語音聴取とは必ずしも相関するわけではなく、聴能的に理解されづらい一つの要因ともなっているのかもしれない。

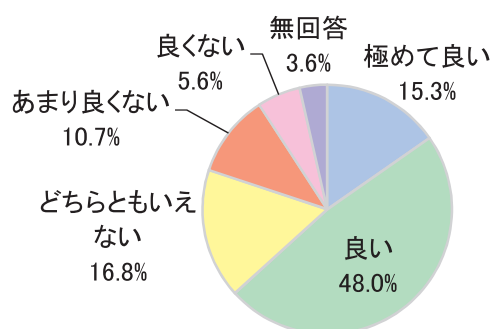


図5-5a 言語音の聞き取り（重複なし）

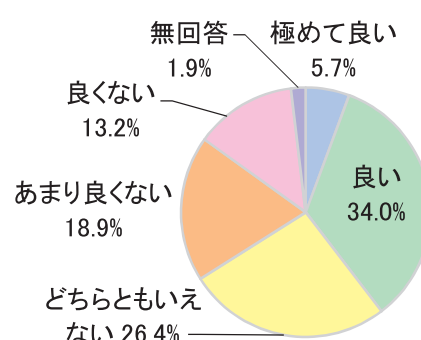


図5-5b 言語音の聞き取り（重複あり）

③教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子

「教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子」は、「よくできている」と「できている」を合わせると「重複なし」72.5%、「重複あり」54.7%であり、良好な者が過半数ではあるが、「重複あり」は「重複なし」に比べると少ない（図5-6a、図5-6b）。全国の特別支援学校（聴覚障害）高等部本科の多くは、コミュニケーション方法として、音声言語のみならず読話や手話・指文字等も使用しており、本設問の傾聴態度とは聴覚のみに限定されたものではなく複数のコミュニケーションモードが混在した傾聴態度といえるかもしれない。

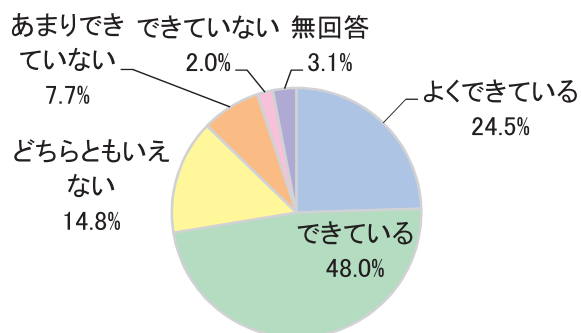


図5-6a 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複なし）

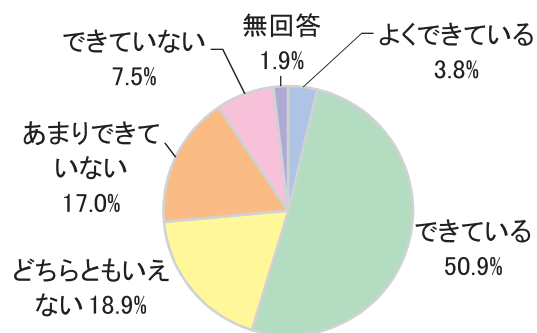


図5-6b 教師や友達の話に集中して耳を傾ける時の様子（重複あり）

④聴覚活用に関する指導の現状と課題

聴覚活用に関する指導の現状と課題に対する記述内容をまとめたところ、主なカテゴリーは、「人工内耳の管理」「聴覚活用」「手話」「発音・発話」「日本語」「傾聴態度・行動」となった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

「重複なし」では、「人工内耳の管理」について、「良好」4件、「課題あり」3件であった。「聴覚活用」について「良好」73件、「課題あり」22件であった。「手話の活用」について「良好」14件、「課題あり」2件であった。「日本語獲得」は「良好」4件、「課題あり」12件であった。「傾聴態度・行動」について「良好」4件、「課題あり」24件であった。特に注目すべき記述をまとめると「聞こえてはいるが言語として認知できない」「本人は聞き取れていないという認識ができていない」「聞き取りで不十分な部分を手話等で補う」などであった。

「重複あり」では、「人工内耳の管理」については「良好」2件、「課題あり」3件であった。また、「聴覚活用」について「良好」24件、「課題あり」18件であった。「手話の活用」は10件であった。「日本語」について「課題あり」4件であった。「傾聴態度・行動」について「課題あり」3件であった。

14) 言語活動（読み書き）

①同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」54.1%、「重複あり」94.3%であり、良好でない者が過半数である（図5-7a、図5-7b）。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

②同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章理解力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章理解力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」55.1%、「重複あり」90.6%であり、良好でない者が過半数である（図5-8a、

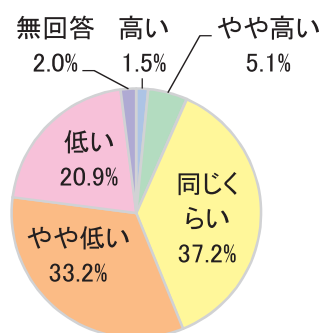


図5-7a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複なし）

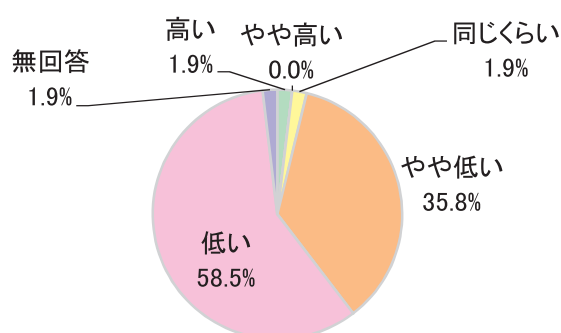


図5-7b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文法力（重複あり）

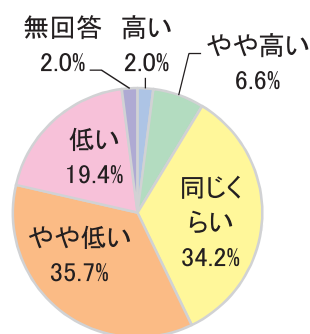


図5-8a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複なし）

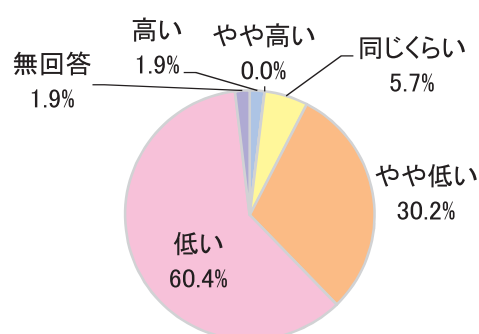


図5-8b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文書理解力（重複あり）

図5-8b)。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

③同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を書く力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」50.5%、「重複あり」92.5%であり、良好でない者が過半数である（図5-9a、図5-9b）。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

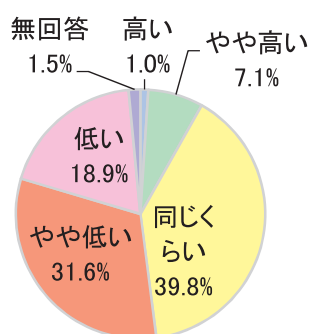


図5-9a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力（重複なし）

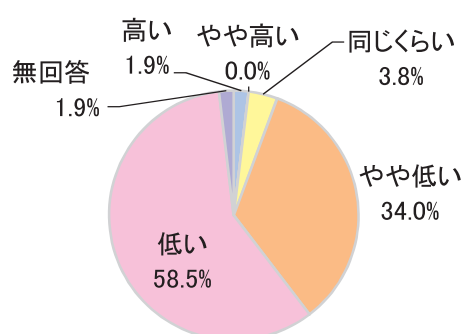


図5-9b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べたメモなどの文を作る力（重複あり）

④同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力」は、「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」63.8%、「重複あり」92.4%であり、良好でない者が過半数である（図5-10a、図5-10b）。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

⑤言語活動に関する指導の現状と課題

言語活動に関する指導の現状と課題に対する記述をまとめたところ、主なカテゴリーとして

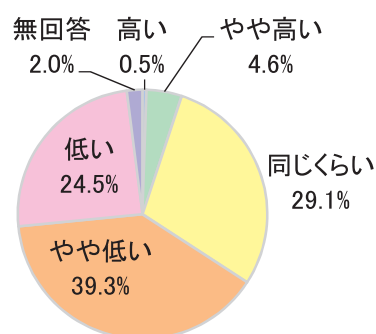


図5-10a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力（重複なし）

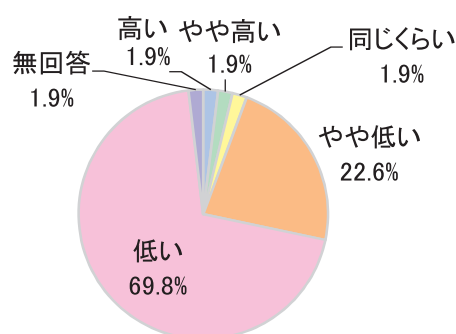


図5-10b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた文章構成力を含む作文力（重複あり）

は、「聞く」「話す」「読む」「書く」「語彙」「助詞等」「文法・敬語」「学年相当」の回答内容であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

「重複なし」では、「聞く」について「良好」12件、「課題あり」14件であった。「話す」については「良好」15件、「課題あり」15件であった。「読む」については「良好」12件、「課題あり」18件であった。「書く」については「良好」12件、「課題あり」37件であった。「語彙」については「良好」13件、「課題あり」49件であった。「助詞等」については「良好」9件、「課題あり」25件であった。「文法および敬語」については「良好」7件、「課題あり」25件であった。「学年相当」については「良好」11件、「課題あり」2件であった。重要な点を整理すると、「語彙を増やすことの課題」、日本語の「読み」「書き」や「助詞」、「敬語」などの課題があげられていた。特に「重複なし」においても言語的課題が多いことは注目すべきである。

「重複あり」では、「聞く」について「良好」2件、「課題あり」2件であった。「話す」については「課題あり」3件であった。「読む」については「良好」3件、「課題あり」20件であった。「書く」については「良好」3件、「課題あり」28件であった。「語彙」については「良好」2件、「課題あり」27件であった。「助詞等」については「良好」2件、「課題あり」14件であった。「文法および敬語」については「課題あり」11件であった。「学年相当」については「良好」3件、「課題あり」6件であった。

5. 対象生徒の学校での学習と生活について

1) 学業成績

①同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績

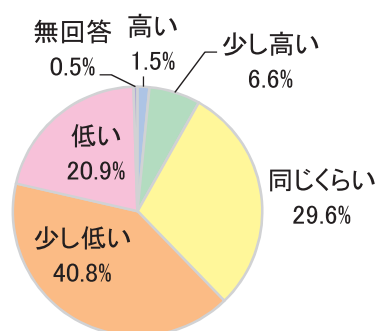


図5-11a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複なし）

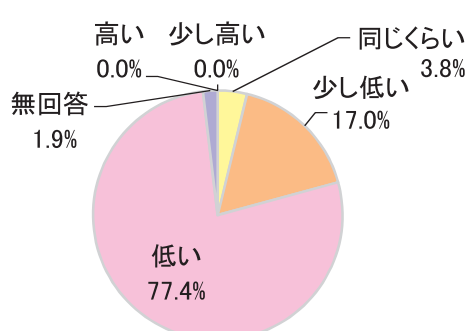


図5-11b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績（重複あり）

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた現在の学業成績」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」61.7%、「重複あり」94.4%であり、良好でない者が過半数である（図5-11a、図5-11b）。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

②潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績

「潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績」は、「比較できないほど低い」と「かなり低い」と「低い」と「やや低い」を合わせると「重複なし」54.1%、「重複あり」67.9%であり、良好でない者が過半数である（図5-12a、図5-12b）。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

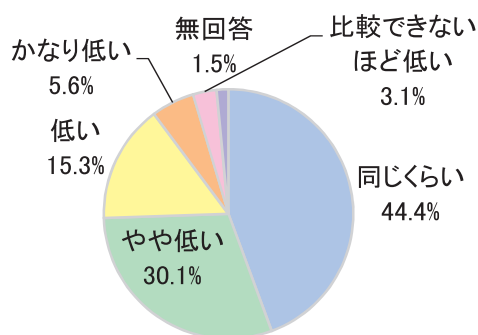


図5-12a 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複なし）

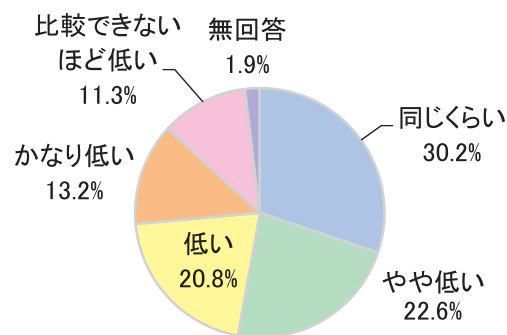


図5-12b 潜在的な学習能力や知的能力と比べた現在の学業成績（重複あり）

③同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力

「同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力」は、「低い」と「少し低い」を合わせると「重複なし」47.9%、「重複あり」90.5%であり、良好でない者が過半数である（図5-13a、図5-13b）。さらに「重複あり」は低い者が著しく多いといえる。

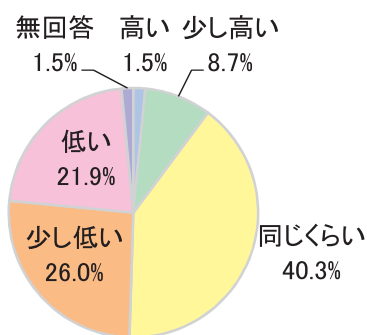


図5-13a 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複なし）

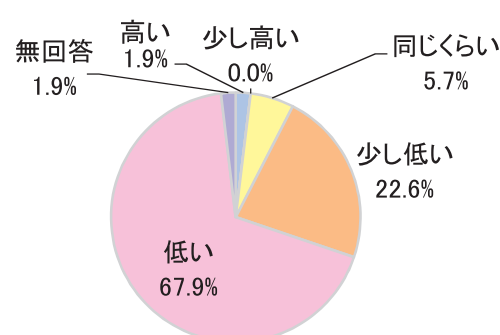


図5-13b 同年齢の健聴の生徒の平均値と比べた読書力（重複あり）

④学習の現状と課題

学習の現状と課題に対する記述をまとめたところ、主なカテゴリーとしては、「日本語指導」「文字の活用」「手話の活用」「視覚的教材」「体験学習」「論理・抽象・思考」「反復学習・定着」「自信・意欲・集中」「学習習慣・主体性」「知的・発達障害・下学年指導」であった。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

「重複なし」は、「日本語指導」33件、「手話の活用」2件、「体験学習」3件、「論理・抽象・思考」23件、「反復学習・定着」20件、「自信・意欲・集中」16件、「学習習慣・主体性」12件、「知的・発達障害・下学年指導」13件であった。重要な点を整理すると、「日本語指導」、「論理・抽象・思考」、「反復学習・定着」、「自信・意欲・集中」、「学習習慣・主体性」などであった。

「知的・発達障害・下学年指導」の課題では、「重複なし」とされているが、「発達障害等が疑われる者、下学年指導が適切な者の存在」に関する記述は留意すべきである。

「重複あり」は、「日本語指導」9件、「文字の活用」1件、「手話の活用」4件、「視覚的教材」1件、「体験学習」2件、「反復学習・定着」についての課題11件、「知的・発達障害・下学年指導」14件であった。

2) 学習態度

①同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度

「同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度」は、「重複なし」では「ほとんどない」29.1%、と「同じくらい」23.5%の2峰性となっているのに対し、「重複あり」では「多い」と「少し多い」を合わせると52.8%であり、「重複あり」では注意散漫の程度の多い者が健聴の生徒に比べて多い（図5-14a、図5-14b）。

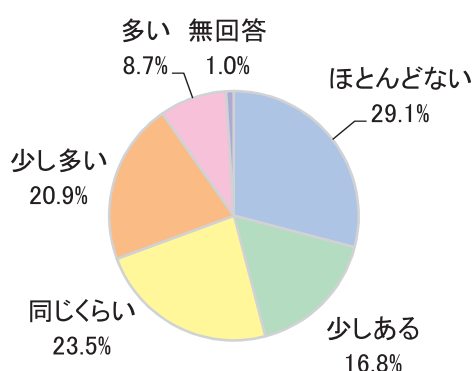


図5-14a 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複なし）

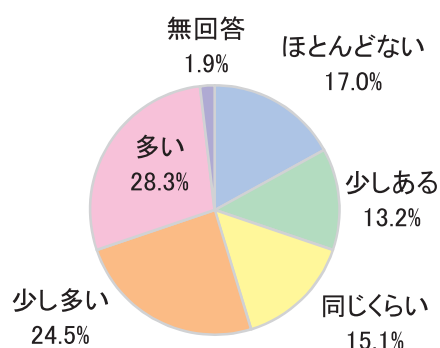


図5-14b 同年齢の平均的な健聴の生徒と比べた注意散漫の程度（重複あり）

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間」は、「重複なし」では「同じくらい」50.0%で最も多くなっているのに対し、「重複あり」では「短い」と「少し短い」を合わせると52.9%であり「重複あり」では注意持続時間の短い者が健聴の生徒に比べて多い（図5-15a、図5-15b）。

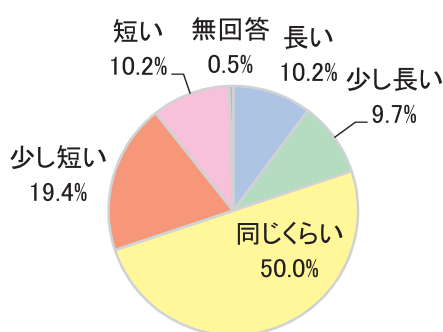


図5-15a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間（重複なし）

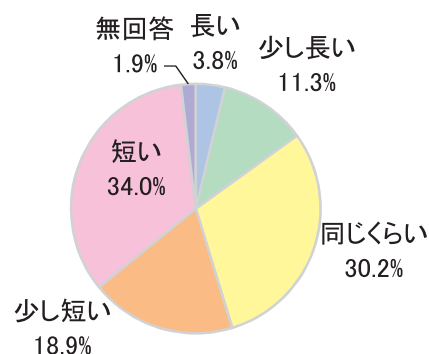


図5-15b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べた注意持続の時間（重複あり）

③口頭による指示に対する戸惑いや躊躇

「口頭による指示に対する戸惑いや躊躇」は、「重複なし」では「時々ある（他の子と同じくらい）」39.3%で最も多くなっているのに対し、「重複あり」では「多い」と「やや多い」を合わせると56.6%であり、「重複あり」では口頭の指示に対する戸惑いや躊躇のある者が健聴

の生徒に比べて多い（図5-16a、図5-16b）。

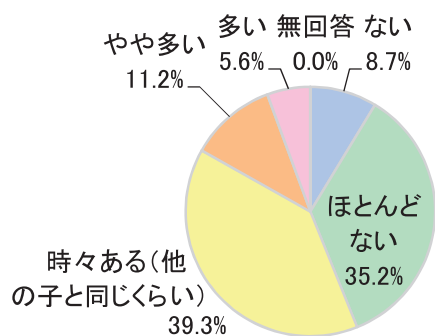


図5-16a 口頭による指示に対する戸惑いや躊躇（重複なし）

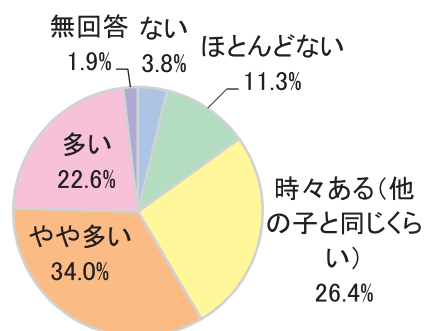


図5-16b 口頭による指示に対する戸惑いや躊躇（重複あり）

④学習態度に対する指導の現状と課題

学習態度に対する指導の現状と課題に対する記述をまとめたところ、主なカテゴリーとしては、課題では「聞き取り」「理解」「注意集中」「学習態度」「体験学習」「コミュニケーション」「状況理解」「思考」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「見通しの指導」「視覚情報の活用」「授業展開の工夫」「コミュニケーションにおける確認」などが見られた。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

「重複なし」では課題として、「聞き取り」7件、「理解」12件、「注意集中」31件、「学習態度」18件、「コミュニケーション」3件、「状況理解」8件、「思考」3件があげられ、指導上工夫していることとして「見通しの指導」1件、「視覚情報の活用」4件、「授業展開の工夫」2件、「コミュニケーションにおける確認」4件、などの回答内容があった。重要な点を整理すると、「重複あり」「重複なし」どちらも「注意集中」「学習態度」の課題があげられていた。指導上工夫していることとして、「見通しの指導」「視覚情報の活用」「授業展開の工夫」「コミュニケーションにおける確認」などは、特記すべき事項である。

「重複あり」では課題として、「聞き取り」7件、「理解」6件、「注意集中」17件、「学習態度」7件、「コミュニケーション」1件、「状況理解」1件、「思考」0件があげられ、指導上工夫していることとして、「見通しの指導」2件、「視覚情報の活用」1件、「授業展開の工夫」4件、「コミュニケーションにおける確認」2件、などの回答内容があった。

3) コミュニケーション能力

①同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力

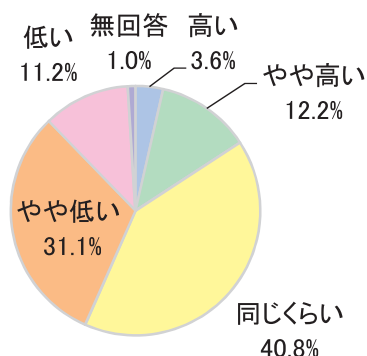


図5-17a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力（重複なし）

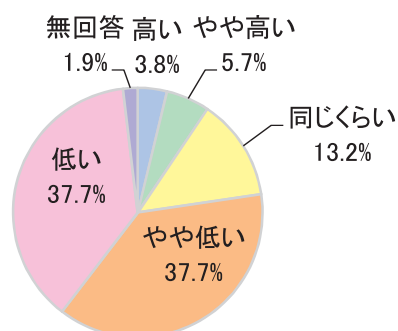


図5-17b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比べたコミュニケーション能力（重複あり）

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比したコミュニケーション能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると42.3%で半数弱であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると75.4%であり、「重複あり」ではコミュニケーション能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（図5-17a、図5-17b）。

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると54.1%であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると94.4%であり、「重複あり」では語彙力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（図5-18a、図5-18b）。

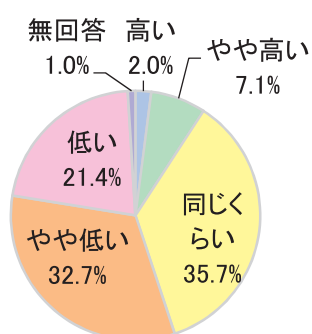


図5-18a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力（重複なし）

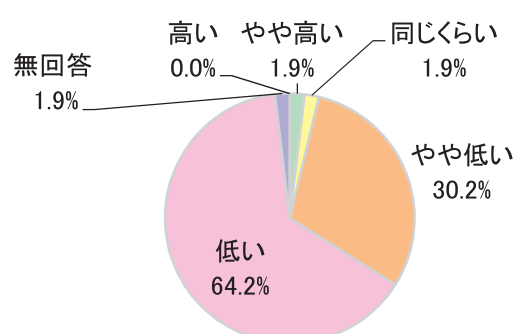


図5-18b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した語彙力（重複あり）

③同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力」は、「重複なし」では「低い」と「やや低い」を合わせると37.8%であるのに対し、「重複あり」では「低い」と「やや低い」を合わせると71.7%であり、「重複あり」では出来事を話す能力の低い者が健聴の生徒に比べて著しく多い（図5-19a、図5-19b）。

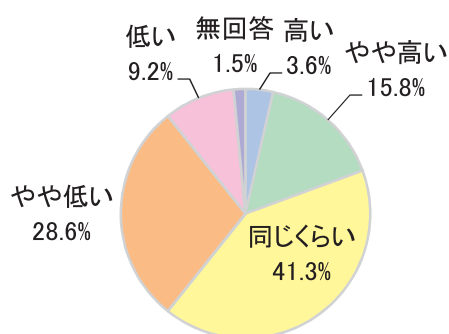


図5-19a 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力（重複なし）

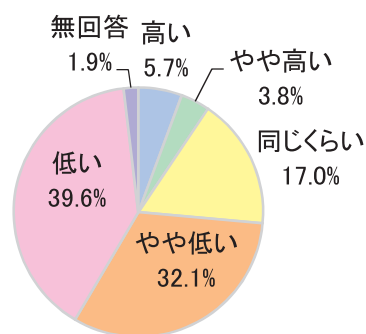


図5-19b 同年齢の平均的な健聴の生徒に比した出来事を話す能力（重複あり）

④コミュニケーションにおける指導の現状と課題

コミュニケーションにおける指導の現状と課題に対する記述をまとめると、主なカテゴリーとしては、課題では「発達障害等」「メタ認知等」「対人関係・心理」「常識・コミュニケーション態度」「日本語・語彙」「口話・筆談」「手話」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとして「SST」「筆談・メモ等の活用」「手話」が見られた。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

「重複なし」では課題として「発達障害等」4件、「メタ認知等」29件、「対人関係・心理」2件、「思考・論理・知識」14件、「常識・コミュニケーション態度」38件、「日本語・語彙」45件、「口話・筆談」13件、「手話」3件であった。指導上工夫していることとして「手話」1件であった。「重複あり」では課題として「発達障害等」4件、「メタ認知等」11件、「常識・コミュニケーション態度」13件、「日本語・語彙」21件、「口話・筆談」10件、「手話」3件であった。指導上工夫していることとして「SST」1件、「筆談・メモ等の活用」5件であった。

以上についてまとめると、「重複あり」「重複なし」とも「日本語・語彙」、「常識・コミュニケーション態度」、「メタ認知等」が重要な課題といえる（図5-20a、図5-20b）。

4) 学校生活

①教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況

「教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況」は、「重複なし」および「重複あり」において「他の子と同じくらい」がそれぞれ37.8%、30.2%と最も多いが、「多い」と「やや多い」を合わせると「重複なし」37.7%「重複あり」22.6%であり、「重複なし」の参加状況は「重複あり」に比べて良いといえる。

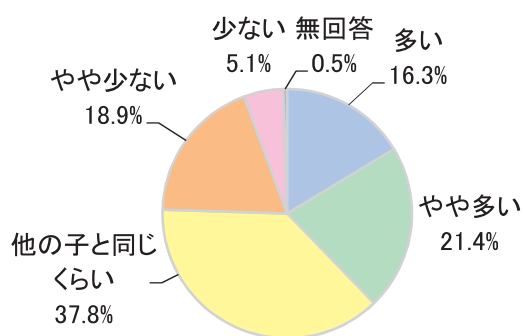


図5-20a 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複なし）

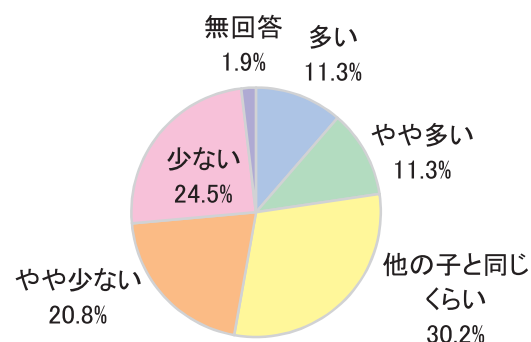


図5-20b 教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況（重複あり）

②持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況

「持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況」は、「重複なし」では「常に持参・提出」と「ほとんど持参・提出」を合わせると57.7%であるのに対し、「重複あり」では「常に持参・提出」と「ほとんど持参・提出」を合わせると52.8%であり、両者とも良好な者が多い（図5-21a、図5-21b）。

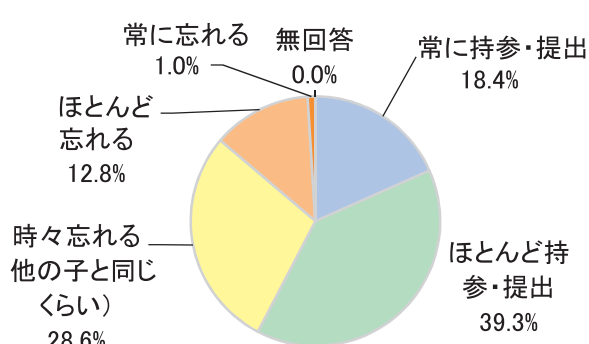


図5-21a 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複なし）

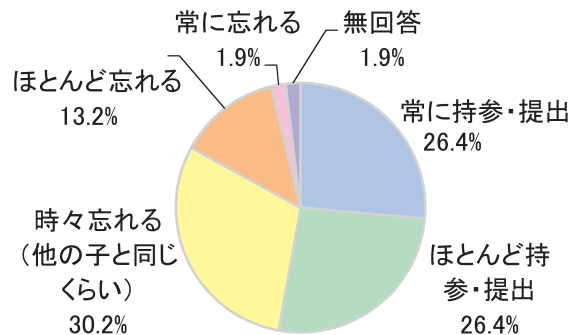


図5-21b 持ち物や宿題などの持参あるいは提出の状況（重複あり）

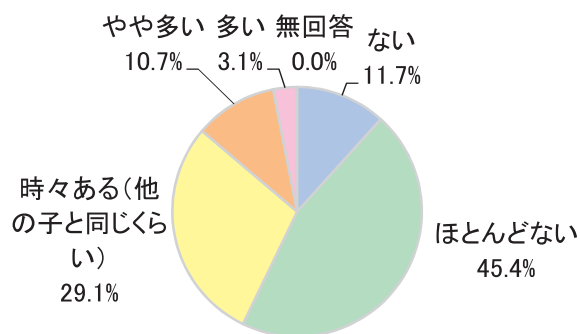


図5-22a 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複なし）

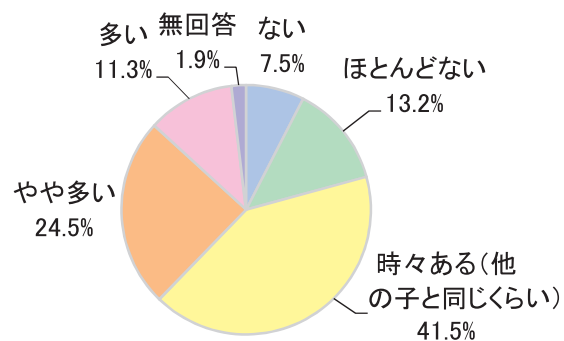


図5-22b 教師の指示の後、課題を遂行することの困難（重複あり）

③教師の指示の後、課題を遂行することの困難

「教師の指示の後、課題を遂行することの困難」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」57.1%「重複あり」20.7%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる（図5-22a、図5-22b）。

④生活指導の現状と課題

生活指導の現状と課題に対する記述回答をまとめると、主なカテゴリーとしては、課題では「重複障害等」「心理面等」「問題行動」「集団行動・社会性」「自立・自信」「計画性」「学習・生活態度」「コミュニケーション」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとしては「個別指導」「メモ・例示・確認等」「ルール作り」「職員連携」などの回答が見られた。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

「重複なし」では課題として「心理面等」3件、「集団行動・社会性」3件、「自立・自信」2件、「計画性」2件、「学習・生活態度」24件、「コミュニケーション」9件であった。指導上工夫していることとして「個別指導」1件、「メモ・例示・確認等」9件であった。「重複あり」では課題として「重複障害等」3件、「心理面等」4件、「問題行動」1件、「集団行動・社会性」1件、「自立・自信」3件、「計画性」2件、「学習・生活態度」4件であった。指導上工夫していることとして「個別指導」4件、「メモ・例示・確認等」3件、「ルール作り」1件、「職員連携」1件、であった。

以上についてまとめると、「重複あり」「重複なし」とも「心理面等」「集団行動・社会性」「計画性」「学習・生活態度」が重要な課題であり、特に「学習・生活態度」は特筆すべきといえる。

5) 学校での行動

①同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動」は、「ない」と「ほとんどない」を合わせると「重複なし」65.8%「重複あり」39.6%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる（図5-23a、図5-23b）。

②同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること

「同年齢の平均的な健聴の生徒に比べ、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること」は、「多い」と「やや多い」を合わせると「重複なし」15.8%「重複

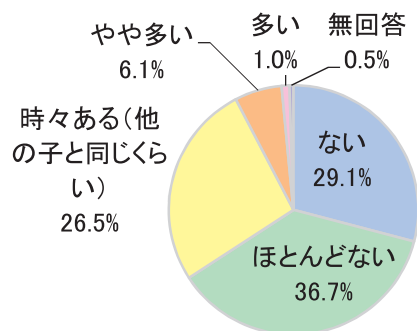


図5-23a 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複なし）

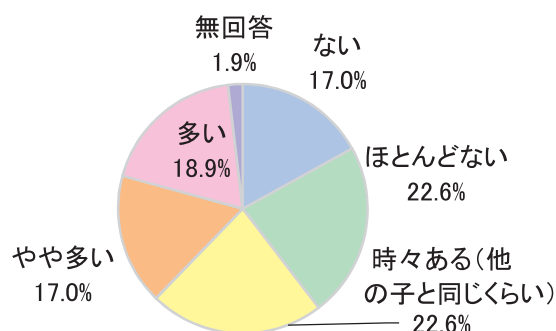


図5-23b 学校での場にそぐわない行動あるいは不適切な行動（重複あり）

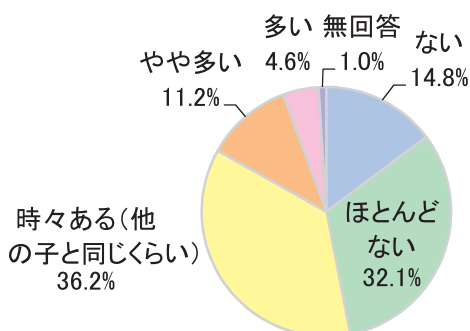


図5-24a 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること（重複なし）

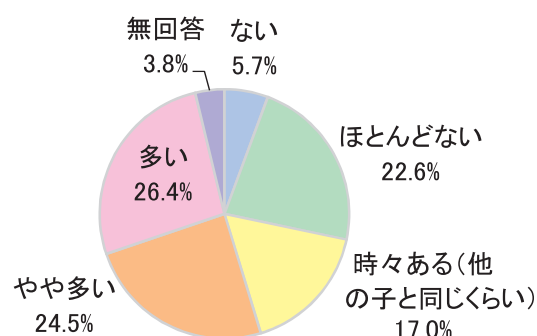


図5-24b 早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすること（重複あり）

あり」50.9%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる（図5-24a、図5-24b）。

③他の子供たちとの良好な関係の維持

「他の子供たちとの良好な関係の維持」は、「非常に良好である」と「良好である」を合わせると「重複なし」58.7%「重複あり」41.5%であり、「重複なし」は「重複あり」に比べて良好といえる（図5-25a、図5-25b）。

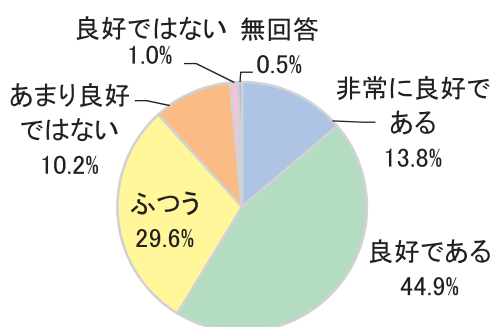


図5-25a 他の子供たちとの良好な関係の維持（重複なし）

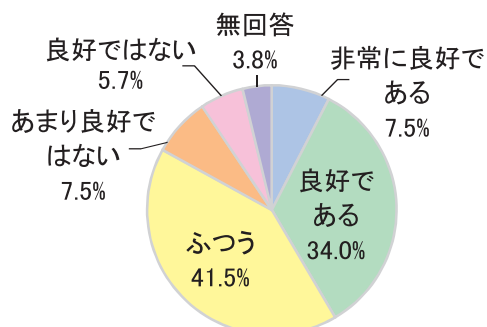


図5-25b 他の子供たちとの良好な関係の維持（重複あり）

④行動に対する指導の現状と課題

行動に対する指導の現状と課題に対する記述回答をまとめると、主なカテゴリーとしては、課題では「情緒・ストレス等」「行動面」「メタ認知」「障害認識」「状況理解」「見通し」「社会性」「コミュニケーション・対人関係」に関するものがあげられ、指導上工夫していることとしては「対話・カウンセリング」「個別指導」「ルール・予定」「手話」「SST」などの回答が見

られた。以下、「重複なし」と「重複あり」に分けて結果を整理した。

「重複なし」では、課題として「情緒・ストレス等」8件、「行動面」3件、「メタ認知」4件、「状況理解」4件、「見通し」1件、「社会性」13件、「コミュニケーション・対人関係」3件であった。指導上工夫していることとして「対話・カウンセリング」2件、「個別指導」3件、「ルール・予定」1件、「手話」1件、「SST」1件であった。

「重複あり」では課題として、「情緒・ストレス等」14件、「行動面」12件、「状況理解」4件、「見通し」1件であった。指導上工夫していることとして「対話・カウンセリング」5件、「個別指導」8件、「ルール・予定」2件であった。

以上についてまとめると、「重複あり」「重複なし」とも「情緒・ストレス等」「行動面」が重要な課題である。「重複なし」では、「コミュニケーション・対人関係」が特筆すべきといえる。また、指導上工夫している点については、「対話・カウンセリング」が重要と思われる。

II まとめ

1. 調査概要

1) 教員に関する事項について

本調査で対象となった高等部本科担当教員の教員経験年数の平均が約8年であり、他の特別支援学校の経験年数も、ほぼ同じであったことから特別支援教育に携わった年数が多い教員が対象で行ったものと思われる。人工内耳について学習したい内容では、基礎的な内容の研修を求める割合が高かったことに加え、指導法に対する希望も見られ、人工内耳の教育的活用に関する研修の必要性が示された。

2) 生徒の実態について

- (1) 人工内耳装用生徒は、重複の有無にかかわらず、音への反応が良いことがうかがえたが、「聞き間違い」や「聞き逃し」の可能性は十分あり、また、そのことに対して生徒本人の自覚は十分でないことがうかがえた。この点は、生徒本人も含め保護者や教員は、聴能的な面で注意すべき点がある。
- (2) 補聴器装用生徒と比較して人工内耳装用生徒は言語やコミュニケーションにおいて、そのメリットが大きい生徒もいるが、メリットがあまりない生徒もあり、かなりバリエーションがあるようである。人工内耳装用生徒については、そのような個人差の大きさをふまえ、その実態に応じた配慮が重要である。
- (3) 人工内耳装用生徒であったとしても、その聴覚活用や言語発達の程度に応じて、読話、手話や指文字、キューサイン等、多様な手段を利用することが必要である。
- (4) 高等部卒業後の希望進路では、重複のなし、重複ありの生徒ともに就職希望が多かったが、これは重複ありに顕著であった。重複なしは、高等教育機関への進学を希望する者も見られ、希望する進路が、重複なしよりも幅広かった。
- (5) 聴能学的には、人工内耳では閾値の下降に伴い、「音への気付き」が良くなっており、これは、傾聴態度の良さに反映されていると思われる。「音への気付き」に比して言語音の聞き取りや言語力、コミュニケーション面、学習面では伸び悩んでいる事例が多い。このこと

は、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用している聴覚障害生徒の大きな課題であるといえる。言語音の聞き取りについては、個人差、人工内耳手術前の言語獲得環境、人工内耳の装用時期および装用後の丁寧な言語指導が重要であり、これらはコミュニケーション面や学習面に影響を及ぼすことから、基本的には高等部本科の課題というより、早期発見後の乳幼児期からの療育・教育の課題であるともいえる。

- (6) 読書力、コミュニケーション力、語彙力、出来事を話す力においては、重複なしと重複ありの生徒では、違いが大きかった。
- (7) 特別支援学校（聴覚障害）における生活面・行動面では比較的適応が良い。このことは、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する人工内耳を装用する聴覚障害生徒にとって、特別支援学校（聴覚障害）のコミュニケーションに配慮した教育環境（手話や指文字、筆談の使用等）に適応できていることを示していると考えられる。

2. 今後の課題

本調査は、人工内耳を装用した高等部本科に在籍する聴覚障害生徒の実態を明らかにした。しかし、人工内耳装用生徒の中には、通常の高등학교へ進学する者も少なくないものと思われ、彼らを対象とした調査を行った場合、本調査結果とは異なる結果が予想される。具体的には、読書力や語彙力などの言語力や学力であり、早期に人工内耳を装用した場合、高等学校の段階において、上記の能力が如何に発達するのかを明らかにするには、特別支援学校（聴覚障害）に在籍する生徒を対象とした調査だけでは十分とは言えず、通常の高校に在籍する生徒を対象とした調査が必要であろう。

また、高等部段階は、思春期の中期から後期に該当し、この時期には、特有の精神発達が見られ、心理的適応などに留意する必要があることから、今後、これらの点と人工内耳装用の関連に焦点を当てた調査が必要であろう。